

山岡莊八

燃え
軌道

書きおろし長篇小説

3

人間軌道の巻



岡 莊 八

えゝ軌道

3

人間軌道の巻



Tahiro

学習研究社

燃える軌道 第3巻 人間軌道の巻

昭和50年8月1日 初版発行

著者 山岡 莊八

発行者 古岡 滉

発行者 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

郵便番号 145

電話 東京 720-1111

振替 東京 142930

印刷 壮光舎印刷株式会社

製本 株式会社石毛製本所

編集責任 桜田 満

編集担当 藤原宣夫

編集協力 タイニチ出版株式会社

© 1975 Sôhachi Yamaoka

Printed in Japan

※この本に関するお問合わせやミスなどがありましたら、文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)学研ユーザー・サービス部「燃える軌道」係へ、電話は東京(03)720-1111または東京(03)727-1600へお願いします。

目次

法学博士	光射しそむ	地人の構想	天理の構想	戦後の伊勢	菊花と蘭花	大鷲に挑む鵒	扉の前
151	135	117	68	54	48	25	7

大戦のあとに来るもの						
314	達人への道	291	生命の支柱	242	理智と情熱	222
					知恵の芽	200
					執心構図	187
					運命と人生	170

装幀・題字

挿画

田代光

田代光

燃える軌道

3

人間軌道の巻

扉の前（一）

入口のドアが開いて、そこから一眼でこの家の主人とわかる穂積陳重博士が入って来た。夫人よりも却かえって若くさえ見える。小柄で如何いかにも整った清潔そうな紳士であつた。

服装はくつろいだ大島紬おおしまとうの和服姿で、その眼まなこざしが殊に澄みきって親しみを感かんじさせた。

「これは穂積先生でいらつしやいますか。私が実は帝国大学の文科の学生内田銀蔵うちだぎんざうクンを介しまして、かねてからご指導を願ねがひ出ておりました広池千九郎ひろいけちくろうでございます」

千九郎がいくぶん固かたくなつて挨拶あいさつすると、相手は柔和な表情に微笑を見せて、

「お話は、内田クンからも、家内からも伺うかがつて、存ぞんじています。早稲田わせだで教鞭きょうべんも執とつておいでだそうで」

歯切れよく、語尾を質問に転じて来た。

「はい。佐藤誠実博士じようじつが編輯へんしゅう長ちやうをなさつて居られる『古事類苑こしるゐん』と、『日本教育史』などの改正増補のお手伝てんいをしながら、『支那文典』という講義録の本を早稲田大学の出版部から出

しましたのがご縁になりました、今年から講義を受持つことになりました」

「それはそれは。日本の百科辞典ともいうべき『古事類苑』のお話は、私も耳にして居ります。あれは何時いつごろ完成のご予定ですか？」

「たぶんあと三年……かれこれ四十一年の秋ごろまでかかるのではないかと思います。実はその佐藤誠実博士が、ご秘藏なされて居られる蔵書の中に、日本ではまことに貴重な元版げん重刻の『故唐律疏議』と申す九冊の珍本がございます。それを拝見致しまして、わが国古代の律（刑罰法）と、中国唐代の律との比較研究を始めましたのが、実は先生のご指導を仰いでみた

いと思ひ立つた最初でございます」

「ほう、唐代の律について……そのような本が日本にありましたか？」

「はい。恐らく一部しか来ていなかった珍本ではないかと存じますが」

「ほう！ 私も始めて知りました。して、その本は、今、何どうなつて、何ど処どこにありますか？」

「はい。私は鄭重ていじゆうに佐藤博士にお返ししました。と、申しますのは、実は、手許てもとで暫しばらく勉強しやうさせて頂きましたが、『倭漢比較律疏』という粗稿を一応書き上げましたので、若し散佚さんいつ等のことがあるては一大事と考えてお返ししたからでございます」

話が、このあたりまで進んで来た時には、もう夫人は、そつと席をはずして、応接室の内では主客の表情が、硬こわばるように緊張きんぱうしだしていた。

御一新以後の日本には、とにかく西洋の文物は急速に流入していた。現に穂積陳重の名も、法学博士の第一号として、法律全般の移入と普及に当たっている、と言うよりも日本に始めて制定された民法草案の執筆者とし、權威として、大秀才の名をはせていた。

しかも、その博士が、

「——世界の法律は大きく五つに分類されるが、その中で中国の法律だけには殆んど研究の手が及んでいない」

と、曾て、東京日日新聞に書いたその嘆きを見落さず、その唐代の律を真剣に研究しているという人物が、しきりに自分に逢いたがってわが家へ日参していたのだから、それこそ心の顛えるような愕きだったに違いない。

「それで、それで……その貴方の書かれた『倭漢比較律疏』という原稿は、何の位の量になっているのですか？」

「はい。和綴で約三十卷にはなっていると存じます」

「三十巻……それを貴方は何処で出版なさるお考えですか？」

「いいえ。出版の自信があれば、先生のところへこうして切々とお伺いは致しません。私は実は先生のご指導でこれを博士論文に書き上げ、帝国大学の法学部に提出してみたいと思っています」

この答えもまた穂積陳重博士を驚倒させるに充分だった。とにかく小学校の教師から独学で史学雑誌を刊行し、更に、これもすでに文学博士と内定している井上頼圀に見出されて、「古事類苑」の編輯員に挙げられ、編輯長の佐藤誠実博士に秘蔵の書庫と稀書を自由に見せられるほど信頼されている相手なのだ。

しかも後に、この貴重な「故唐律疏議」は、「古事類苑」完成の忘れ難い記念として、佐藤博士の手から直接広池千九郎に贈呈されていたのだが……

「すると貴方は、その元時代に出版された官撰の貴重な資料を基礎にして、日本古代の律と比較研究し……つまり、倭と漢の両者を比較しながら論じて見たい！ と、こう仰言るのですね？」

「はい。しかし、それは、資料が唯一無二のものだけに、軽く扱っては東洋全体の法律思想をゆがめる結果になり兼ねません。そこでこれが独断に墮することを怖れ、何誰か信頼出来る方のご指導を得て完成したいところ考えたわけでございます」

「フーム。それは、学問の権威のためにも大変大切なことだと思います！」

「その時私は、曾て先生が新聞にお書きになって居られたお言葉の一節を思い出しました。世界中の法律は大きく五つに分類されるが、その中で中国の法律だけには、殆んど研究の手が及んでいない……というあの先生のお言葉です。多くの人々は、その法律が五つに分類されること

にすら気付いていません。同じヨーロッパにしてもイギリスはイギリスを主張し、フランスはフランスに捉われ、ドイツはドイツに執着する。これではローマの人間はローマ法に縛られ、東洋人は東洋の法律の籠の中で誇らかに闊をつくる。学問に国境は無い、などと言っていないが、実は学問そのものの中にわざわざ国境を作ったり、理解の垣根を設けたりして、知らず知らずの間に戦争という悲惨事の原因までを構築してゆくことになりかねない。学問の進歩が生半可のために、各民族それぞれが、自我の固執に陥ってゆくとしたら、いったいこの地球は何うなってしまうのでしょうか？」

そこ迄言うと、穂積博士は手を挙げてさえぎった。

「そうです。確かにその通りです。それで現に日・露間の激突は避けられなくなりつつあります。そして、戦いの結果とは無関係に、それぞれの国民が自分こそ正しいのだという錯覚と主張を続けながら犠牲者の数を殖やしてゆくでしょう。よろしい！ 私共は、私共文官に許された範囲内で、その蒙を学問によって啓いて行く努力をしましょう。学問の進歩を無視した文明社会はあり得ません。ゆっくりと腰を落着けて、貴方は、その五つの文明の中の中国の法律思想の解明に当って下さい。私も、及ばずながらそのお手伝いをしながら、私の学問の他の部分の正しい解明に努めます」

「すると、正しい解明は、まだまだ他にも不足なのだと仰言いますか？」

「お恥しいことです！　その証拠に、法律の手では、これから起る日・露間の激突という血腥い現実すら何うにも排除し切れません。そこ迄深くまだ文明は滲透も洗練もされていないと言つてよい。ですからいよいよ冷静に、文明の車輪を前方へ推進させてゆくのが、今のボク等の責任だと思っています」

それは、一つの説得というよりは、やはり慈父の慰撫であり、訓えの重みを持っていた。

「われわれの身边には今、文武両道という、軌道を二つに分けた慣用語があります。これが双方の車輪をなして社会を形作っているわけですから、その構造を無視してゆくと車輪は途中で転覆します。わかり切ったことですが、私もあなたに注意されて、あぶなく独走しかけているのに気が付きました」

そこで、穂積博士は又柔かい笑顔を取戻して、

「一つ力を協せて、文官は文官らしい車輪のすすめ方を考えましょう」

言われてみると広池千九郎には、もう何も今日直接に言わねばならないことは無かった。彼の研究の重要さについては、博士は全身で認めてくれた。そしてそのために協力しようという意思表示も、それが五つの法学系統の解明に無くてはならない重大な研究事項のポイントであることも認めてくれた。

「お願いします。これで先生にご指導を仰げることになりますれば、私にとって、この上もな

い幸いでございます」

素直に一礼しながら、千九郎は微かに赤くなっていた。

いったん主張しだすと、是が非でも結論を押し付けようとあせってゆく自分の性急さと、意地ッ張りとは、博士の前で、少年のような羞恥になつてゆくのがよくわかった。

そこへ再び夫人が、盆の上に郷里から届いたという蜜柑を山盛りにして現われた。

「お話は済みましたか。さ、郷里の蜜柑でございます。今日は、一つ、場違いですが、紀国屋文左エ門でも思い出しながら、試食してみても戴きましようか」

夫人が現われると、一瞬にして華かな空気が部屋いっぱいに満ちてゆくのが千九郎にもよくわかった。

扉の前 (二)

人間がその生涯に出遭う人々の数は、決して少いものではない。井上頼圀に出遭うと、半ば飘逸な、気のおけない父親に会ったような甘えた心易さを覚えてゆくのに、佐藤誠実博士はその反対だった。前へ坐っただけで肩の凝る感じがした。口を大きくへ、の字に結び、こつちを見

る時、何時も必要以上に顔を上げて見降すようにする。それが穂積博士となると正視にも笑顔にも、緊張感にも、無視感にも、計算され、洗練された理性の用意を感じさせるのだ。

ただ共通しているのは、何れも誰かに見られているという意識のあるらしいことであつた。

これは三人とも教壇に立って、学生、生徒に対してゆくという職業からかも知れなかつた。

いや、そうした教壇の上の顔の他に、それぞれが異つたもう一つの顔を持っていた。

井上頼圀の顔は、時々、火事場見物の弥次馬になり切っているかのような、気はおけないが、しかし油断は禁物というところがあり、佐藤誠実には、わざわざ一つの目的を持って造られた仏像の中の忿怒像の匂いがあつた。

笑うと、一度にそれは消し飛ぶ癖に、笑つてはいけないのだと信じ込んで、わざわざ怖い顔をしている。笑うと実は大黒天そっくりになるのだが、そんな顔をするのは年に一度か二度で、平素はいつも毘沙門天か不動尊を気取っていた。或いは仁王さまと言ってもよい。

それが穂積陳重になると、仏像の感じではなかつた。もっと礼儀正しく彫りあげられたギリシャ神話の中の彫像に通ずる現実感を帯びている。同じ彫られた人形にしても古来からある日本の雛の伝統ではなく西洋の蠟人形か博多人形の写実性に近く、汀の小石にたとえれば、それは人間同士の波に洗いぬかれた岸辺の玉石の感じであつた。

筋が通らなければ会おうとはせず、会つても近寄り難い冷静さは失うまいと努めている。言